

鑑賞と関連させた歌唱指導[†]

—合唱指導における実践—

小原 伸一*
宇都宮大学教育学部*

表現活動の一つである歌唱指導の中で、歌詞等を含めた楽曲の内容を理解することは、演奏するための音楽表現を充実させる上で重要な事柄となる。特に、オペラ（歌劇）の中にある合唱曲を歌う場合、作品中の場面設定や音楽的な位置付けなど、歌曲とは異なる要素を含めた内容の理解が必要である。舞台上の登場人物の心情を把握し、自分自身をその役柄に重ね合わせて歌うことができれば、オペラの中の合唱曲を自ら楽しみ演奏することができるようになる。そのためには、楽曲の鑑賞機会を設け歌う人の楽曲への理解を助けることが有効である。演奏に良い効果を与え歌唱活動を充実させるため、鑑賞と一体化させた歌唱指導を実践することで演奏の内容を高めることができた。

キーワード：鑑賞 歌唱 歌劇 合唱指導

1. 歌唱指導内容の特徴

筆者は日本女子大学生涯学習センターが開講する歌唱講座で歌唱指導を行なっている。学習者は講座を受講した一般の社会人約50名で、女性が40名、男性が10名ほどとなっている。音楽経験は様々であり、歌に興味を持ち講座に初めて参加した人から、学生時代に合唱部で歌っていたことがあるという人まで様々である。

講座内容として、選曲と指導方法に大きな特徴がある。一つ目は選曲で、通常社会人を対象とした合唱団や歌唱講座などで歌われる曲は、邦人作曲家が作曲した日本語の歌詞による歌曲や合唱曲が一般的であるが、この歌唱講座では「オペラの合唱曲を原語で歌う」ことである。二つ目は、初心者から経験者まで幅広い学習者に対応した指導法を採り入れていることにある。この二点が講座内容の大きな特徴となっている。

(1) 選曲について

講座では二種類の楽曲を用意している。一つは、

有名で多くの人がその旋律を知っていて歌える曲であり、もう一つはオペラの合唱曲である。

前者は、小学校の共通教材となっている「うみ」や「春の小川」などの文部省唱歌が含まれている。これは受講生の誰もが知っていて、導入段階で歌うことの楽しさを体験することによって、次の合唱曲に意欲的に取り組めるようにするためである。

後者はオペラの合唱曲である。本講座では、通常なかなか触れることのないオペラの中の合唱曲と出会い、それを実際に歌う体験を持つことができるようにしている。

声楽曲では、歌詞の内容から作品に描かれた音楽の世界を知る大切な学習が含まれている。オペラの合唱曲では、具体的な場面や登場人物が設定されそれらが物語の流れの中で明確に位置づけられている。これは歌詞内容によって規定される抽象的な世界を創り上げるタイプの歌曲とは異なり、歌う上で自分自身が作品中の役柄と重ね合わせ、より豊かな音楽表現に迫ることができるという利点がある。

(2) 歌詞の言語について

オペラの歌詞は、イタリア語、ドイツ語、フランス語、ロシア語など多様な言語が使われている。これまで歌唱講座ではこれら多様な言語で作曲されている合唱曲を取り上げ、その歌詞をいずれも作品が

[†] Shin-ichi KOHARA*: Singing and Music Appreciation: A Case Study in Chorus Lessons.

Keywords : Music Appreciation, Singing, Opera, Chorus lesson

* School of Education, Utsunomiya University
(連絡先:koharas@cc.utsunomiya-u.ac.jp)

作曲された原語を用いて歌っている。

(3) 歌唱指導の配慮

発声の基礎トレーニングを含め、異なる音楽経験を持った人たちの集まりである講座では、それぞれの受講生が学びの満足感が得られるような工夫が必要となる。特に学習内容の難易度は大きく関わる要素の一つである。

初心者の方を中心とする初歩的な内容だけでは経験者の方にとって物足りなさが生じる。また難し過ぎる内容では学習内容が消化できず達成感を得る事ができない。同時に、演奏面での音楽的な深まりがなくては、本講座の意義が薄れてしまうことになる。

手応えのある内容を学習者の負担を少しでも軽減させ限られた回数の中で演奏を仕上げることに、これが講座の指導で最も必要とされる配慮事項である。本稿ではその実践の中から、イタリア語の合唱曲の例をまとめた。

2. 演奏楽曲について

ここでは、2016年度後期講座の実践を報告する。曲目はヴェルディ作曲のオペラ《椿姫》の第2幕から、その後半の場面で歌われる「マタドールの合唱（スペインの闘牛士の合唱）」を取り上げ歌唱指導を行った。

この合唱曲は、時代設定が19世紀中頃、《椿姫》の主人公ヴィオレッタの友人フローラがパリの豪華な館内の広間で主催した夜会の場面で歌われる。歌うのは夜会に出し物のゲストと呼ばれた興行師たちである。彼らの中には、占いをするジブシー娘たちと闘牛士の芝居をする男性陣が含まれている。合唱の後半では、夜会の主要な招待客であるパリの貴族と婦人及びその友人たちが加わる。

導入部分はハ長調4/4拍子で、明るく晴れやかな中ゲスト陣の闘牛士達が勇ましく登場するところから始まる。続いて本編、ト短調3/8拍子で闘牛士と娘の恋愛物語が闘牛士を演ずる男性によって歌われる。主催のフローラや主賓の貴族が加わる経過部分を経てト長調となる後半、全員で賑やかに盛り上げて終わる。

楽曲の編成は混声四部で書かれているが、曲の始まりはテノールとバスによる男声二部で開始され、途中で女声二部と男声二部が交互に歌われる部分を経て、後半を全員で歌い盛大に終わる構成になっている。講座は受講者のパート人数に偏り（男性パー

ト、特にテノールが少ない）があり、そのままでは演奏効果が薄れてしまうため、男声パートの一部では女性も参加してもらい歌うようにした（ト音記号で書かれているテノールパートを女声に振り分けて演奏。ヘ音記号のバスパートは読譜に困難な状況もあり筆者自身が歌うことで補っている）。

3. 歌唱講座の設定

(1) 練習計画

本講座は『歌唱国産・楽しく歌いましょう』として2016年9月24日から2017年3月16日までの期間、全12回で実施した。各回90分の講座である。

講座番号 B619	歌唱講座 楽しく歌いましょう	小原 伸一 宇都宮大学教育学部 教授																																				
発声から歌唱法まで、声楽の基礎とアンサンブルの練習を行っています。日本の歌を含め様々な声楽曲を歌いながら、講師のみなさんの声が響き合う練習を大切にしています。		■受講料 一般会員：15,000円 本学学生：6,000円																																				
歌うことが初めての方も、各回とも継続して参加できるように練習を進めたいと思います。美しい旋律やハーモニーに歌うすばらしさを体験してみたい。また、ひとりひとりの方が自分の新しい声を探すとともに、声の持つ表現の豊かなアンサンブルの魅力も体験できるようにしたいと思います。基礎練習から演奏までを含め、初心者の方から経験者の方まで幅広く一緒に歌を楽しめる講座にしたいと思っています。		■定員 80名（申込順） ■練習可能回数 10回																																				
<table border="1"><tr><td>● 10/20 回</td><td>日本の歌</td><td>世界の合唱曲①</td></tr><tr><td>● 11/17 回</td><td>日本の歌</td><td>世界の合唱曲②</td></tr><tr><td>● 11/24 回</td><td>日本の歌</td><td>世界の合唱曲③</td></tr><tr><td>● 12/15 回</td><td>日本の歌</td><td>世界の合唱曲④</td></tr><tr><td>● 12/22 回</td><td>日本の歌</td><td>世界の合唱曲⑤</td></tr><tr><td>● 1/19 回</td><td>13:30</td><td>日本の歌 世界の合唱曲⑥</td></tr><tr><td>● 1/26 回</td><td>15:00</td><td>日本の歌 世界の合唱曲⑦</td></tr><tr><td>● 2/ 9 回</td><td></td><td>日本の歌 世界の合唱曲⑧</td></tr><tr><td>● 2/16 回</td><td></td><td>日本の歌 世界の合唱曲⑨</td></tr><tr><td>● 2/23 回</td><td></td><td>日本の歌 世界の合唱曲⑩</td></tr><tr><td>● 3/ 9 回</td><td></td><td>日本の歌 世界の合唱曲⑪</td></tr><tr><td>● 3/16 回</td><td></td><td>日本の歌 世界の合唱曲⑫</td></tr></table>		● 10/20 回	日本の歌	世界の合唱曲①	● 11/17 回	日本の歌	世界の合唱曲②	● 11/24 回	日本の歌	世界の合唱曲③	● 12/15 回	日本の歌	世界の合唱曲④	● 12/22 回	日本の歌	世界の合唱曲⑤	● 1/19 回	13:30	日本の歌 世界の合唱曲⑥	● 1/26 回	15:00	日本の歌 世界の合唱曲⑦	● 2/ 9 回		日本の歌 世界の合唱曲⑧	● 2/16 回		日本の歌 世界の合唱曲⑨	● 2/23 回		日本の歌 世界の合唱曲⑩	● 3/ 9 回		日本の歌 世界の合唱曲⑪	● 3/16 回		日本の歌 世界の合唱曲⑫	 Profile 小原 伸一（こはら しんいち） 東京藝術大学理学科卒業、同大学院修了。山小茂樹、小村健、中野実と各師に師事。東京オペラ・オーケストラ、藤吹奏楽団、文化庁主催の「全日本吹奏楽コンクール」審査員、朝日放送音楽部副部長（現・TAKKOR!）担当出演。自ら、ロシア音楽家協会理事として、宇都宮大学教育学部教授、早稲田大学エグゼクティブ・フェロー。講師、指揮は声楽、音楽教育学。
● 10/20 回	日本の歌	世界の合唱曲①																																				
● 11/17 回	日本の歌	世界の合唱曲②																																				
● 11/24 回	日本の歌	世界の合唱曲③																																				
● 12/15 回	日本の歌	世界の合唱曲④																																				
● 12/22 回	日本の歌	世界の合唱曲⑤																																				
● 1/19 回	13:30	日本の歌 世界の合唱曲⑥																																				
● 1/26 回	15:00	日本の歌 世界の合唱曲⑦																																				
● 2/ 9 回		日本の歌 世界の合唱曲⑧																																				
● 2/16 回		日本の歌 世界の合唱曲⑨																																				
● 2/23 回		日本の歌 世界の合唱曲⑩																																				
● 3/ 9 回		日本の歌 世界の合唱曲⑪																																				
● 3/16 回		日本の歌 世界の合唱曲⑫																																				

資料1 歌唱講座の開講案内

期間中、年末年始を除きほぼ2週間に一回の割合で練習を進めたことになる。講座は指導講師の筆者の他、助手としてピアニストが一名ついている。

この学期では楽曲を二曲取り上げた。一曲はロシア民謡より「カリнка」、もう一曲がオペラ《椿姫》から合唱曲「マタドールの合唱」である。

初回と2回まで民謡曲を導入曲として学び、3回目以降、並行してオペラの合唱曲に取り組んだ。オペラの合唱曲は10回で仕上げることになる。

当初、オペラの合唱曲全体を練習する予定で開始し、楽譜は全体で8ページの予定で作成し準備していた。しかし、今回、講座回数と内容の難易度から、練習の進捗状況を見極めながら、途中で演奏範囲を区切ることが出来るよう、予め練習範囲を3段階程度（4、6、8ページ）と定めておくことにした。

(2) 練習の進度

3回目、オペラの合唱曲の練習を開始した。通常曲の最初から練習を行なっているが、今回は楽譜の最後（8ページ目）から練習を開始し、徐々にその

前の部分を加えて歌える範囲を増やすという方法を取ることにした。練習は楽譜の8→7→6→5→4→3→2→1の順で進めることになる。

楽譜は音楽のフレーズが各ページ内で収まるようにし、各ページ単独で練習できるよう作成した。また、楽譜は音名版、発音仮名版、原語版の三種類を用意した。印刷は8-7、6-5、4-3、2-1面を組み合わせて1枚に収め4枚の仕上がりとし、楽曲の最後の部分8-7から配布して練習を開始した。

最初に8-7の音名版の楽譜で歌う練習から入り、まず旋律を歌えるようにする。次に、歌詞の発音練習（この時原語の歌詞にはまだ触れない）を行なう。発音練習には大きく4段階あり、まず仮名を読み母音と子音の組み合わせを発音できるようにする。2段階目は、それぞれの発音を楽譜で割り付けられている音価（リズム）に合わせて読む練習をする。ここでは読み合わせが少し進んだところで、ピアノで歌唱パートの音を同時に弾き（この時、受講者は高さに関係なく長さを一致できるように発音する）発音と高さの雰囲気を感じてもらい、次の音高を付けて歌う段階へつなげられるよう配慮している。3段階目として、高さを付け旋律に言葉を合わせて歌う練習を行なう。ここまでは仮名による歌詞の発音練習段階となっている。

最終の第4段階目は、原語で歌詞が書かれた楽譜を見て歌う練習になる。ただし、講座では、音楽経験の違いや、今回の原語（イタリア語）への習熟度の違いを考慮し、演奏に用いる楽譜は仮名版でも原語版でもどちらでもよいこととし、受講者の方の選択に任せることにしている。

6回目の練習では、87の2ページ分を、上記の4段階目まではほぼ達成することができたため、7回目以降は続いて65の2ページの楽譜を配布し練習を進めた。

7回目を終了したところで、残りの回数が5回であること、65の部分に転調を含んだ箇所があり、既習部分の87と小節数（量）ではほぼ同等ではあるものの内容（質）として難しい部分があり練習に時間を要することが見込まれたため、受講生の負担等を考慮し、今回の講座では全曲ではなく、合唱曲の後半部分となる8-7-6-5までとして、この4ページ分を残りの5回で仕上げる（予め設定した範囲の中で最も少ない）ことにした。

楽曲の内容としては、合唱の導入部分と本編前半に相当する部分をカットし、後半その場面に登場する全員で次第に場を盛り上げて歌い終えるという部

分のみを歌うことになる。

(3) 練習計画の調整と演奏の完成

無理に全曲を手がけると、練習の成果としての最終回の演奏が十分に満たされず、受講後の達成感と講座への満足度が著しく損なわれることにもなってしまう。また、そうした体験は次の講座に繋げる意欲を失う原因ともなるため、限られた部分となるものの、その音楽の完成度を高めることの方が重要になる。計画の調整と学習量の判断を受講者の状況に即して行なう事が大切である。

8回目から11回の4回にわたり6-5部分の練習を進めた。練習回数が限られていることと、6-5が歌詞の発音と音楽的要素の難しさもあり、丁寧に指導した。

既習部分となる8-7も毎回復習する形で歌ったため、曲の最後の部分はかなり習熟度も上がり、原語の持つ音楽の表情を伝えられるところまで歌う事ができるようになった。

最終回となる12回目は、省略となった前半部分を筆者が独唱で補い、それに続いて5-6-7-8を全員で歌う形でまとめた。助手のピアニストは合唱曲の前奏部分、間奏部分などオーケストラパートをピアノ・ヴォーカルスコアを基に適宜再現して演奏した。この合唱曲が持つ全体の雰囲気を感じてもらうため協力していただいた。

3. 鑑賞の設定

オペラの合唱曲を歌うために、この曲の鑑賞を積極的に取り入れることにした。

講座の会場は施設内のホールで、天井も高く良い演奏環境を提供している。また視聴覚設備も整っている。オペラは舞台芸術作品であるので、映像を含めた鑑賞の機会を必要に応じて設けた。

後期歌唱講座に参加した受講生により多くの鑑賞の機会を提供するため、今回は(1)に加え(2)の鑑賞講座も連動できるよう開講した。

(1) 歌唱講座内の鑑賞

歌唱講座内では、オペラ《椿姫》の中から、練習する合唱曲部分のみを抜粋して映像付きでの鑑賞と音声のみの鑑賞を行なった。

映像付きは、オペラの合唱曲練習の初回となった第3回目に視聴した。視聴に当たっては、オペラ全体の中での位置づけと、その場面の前後の流れ、舞

台上に登場する人物の簡単な説明を行なっている。

映像付きは、途中6-5の練習に入った時と、練習範囲全体がほぼ完成してきた時に再度鑑賞する機会を設け、合計3回鑑賞している。

この他、音声のみの方は、音階練習の区切り、歌詞で2ページごとに完成した段階、ある程度発音に馴染んで歌えるようになった段階、それぞれで鑑賞の機会を設けた。映像付きより回数は多くしてある、音声のみでは、各自楽譜を見て演奏箇所追いながら目と耳で表現を確かめる段階を作れるようにしている。プロによる演奏を聴くと、楽曲本来のテンポで演奏されているため、初期段階では練習のためのゆっくりとしたテンポとの違いに驚くことが多い。歌詞の音符への割り付け方や、予想以上に早く歌い納めなくてはならないことなど、これから演奏しようとする内容の難しさと向き合うことになる。

歌唱講座内での鑑賞は、これから演奏しようとする合唱曲の音楽的な特徴や、歌詞などの発音、旋律の構成などを聴き取ることに重点が置かれる。歌唱指導には、三種類の楽譜を活用しながら、鑑賞で聴き取る力を身に付けそれを生かし歌う力を伸ばす、という音楽的な能力の伸長も含まれている。

(2) 鑑賞講座『オペラを楽しむ』同期開講

歌唱講座期間中に聴講可能な鑑賞講座を開講し、歌唱講座で学んでいる合唱曲を含んだオペラ《椿姫》全曲を鑑賞できるようにした。

B018 オペラを楽しむ 小原 伸一 宇野女子大学教育学部 教授

1600年頃に今日のオペラが誕生し、約400年の間に多くの作品が作曲されました。主要なオペラ作曲家だけでもイタリアのモントヴェルディから日本の團伊玖磨まで、90名以上以上に及んでいます。有名な作品から隠れた名作まで、時代を追いながら作品の紹介を進めます。作曲家や作品の解説・鑑賞、演奏なども含め、みなさんがオペラに親しむを感じ楽しめるようになれたらと思っています。

11/24 日	ヴェルディ 歌劇《椿姫》①
12/ 8 日	ヴェルディ 歌劇《椿姫》②
12/22 日	ヴェルディ 歌劇《椿姫》③
1/12 日	ヴェルディ 歌劇《椿姫》④
1/26 日	ヴェルディ 歌劇《椿姫》⑤

Profile
小原 伸一 (こはら しんいち)
東京藝術大学音楽科卒業、国大
大学院修士、東京交響楽、中村路、
小野光子名氏に師事。日本オペ
ラ協会、音楽家協会、文化庁
音楽オペラ協議会、新国立劇場
国際音楽会議「種」FARFALLI
等に出演。日本・ロシア音楽家
協会常任委員。宇野女子大学教育
学専攻科、早期教育・音楽エ
デュケーション講座、専門は
音楽、音楽教育。

資料2 歌唱講座の開講案内

開講期間は2016年11月24日から2017年1月26日の5回で、歌唱講座と聴講期間が重なるよう設定した。時間は各回90分となっている。聴講は任意のため、全員が鑑賞講座を選択しているのではない。

時期としては、歌唱講座が始まるオペラの合唱曲練習がほぼ半分程度まで進んだ頃に鑑賞講座が開始と

なる。1回目の概要に続いて、第1幕から順に詳しく映像と解説で鑑賞を進めている。合唱曲の第2幕後半は鑑賞講座の4回目で紹介した。歌唱講座では曲の音楽が把握され、誰がどのような場面で何を歌っているのか、という次の段階へ理解を深める関心が高まって来ているところである。

オペラ全編の鑑賞を通して、この合唱曲がドラマの本筋とは違う、舞踏的要素を伴った娯乐的(オペラを観る人を楽しませる)な場面で披露される二曲(もう一曲は女声合唱による「ジプシーの歌」)の中の一つであり、主人公のヴィオレッタの運命と対局にある華やかで軽さを持つ音楽であることが見えてくる。そして、この合唱曲は、作曲家ヴェルディが主題の深層にある刹那的な側面を社交界の人々によって我々に示し、作品に奥行きを持たせていることが分かる。そこに、合唱曲単独では感じる事のできない世界を知ることができるのである。

鑑賞講座を受けた受講生が混じり合う歌唱講座では、第2幕の鑑賞を終えた後半の練習において、音楽を創り上げる上で大きな変化が見られた。受講生からはオペラの合唱曲への理解が深まり、歌うことの楽しさが得られたという感想が多く寄せられた。

4. まとめ

歌唱指導では、楽曲の演奏水準を高めることで、演奏者が得られる満足感を高めることができる。しかし、社会人を対象とした公開講座などでは、音楽経験の異なる受講生によってメンバーが構成される。経験の違いによる声楽的演奏能力の差を超えて、終了時には参加したすべての受講生が歌うことの満足感を得られる工夫が必要である。

歌唱講座の内容に特色を持たせ、一般的な合唱団や声楽講座とは違った体験を通して「歌うことの素晴らしさ」を実感できるような歌唱指導が必要である。そこには音楽科の歌唱指導実践の質的な転換を可能にする要素が多く共有されている。ここで紹介した二講座はどちらも質の高い内容で社会に受容されている表現と鑑賞の実践例である。音楽授業にその成果を還元したいと考えている。

[参考資料] 日本女子大学西生田生涯学習センター
公開講座案内 2016年後期講座

平成29年3月31日 受理